

常靜子劔談 抜粹

一、わぎの迅はやきを心がくる者は、己を頼むが故に還て遅し、必ず其法に依て爲す者は、其わぎ不い迅えどもと雖、遂に迅速をなす、一略一

一、劔術は手のわぎなることは勿論ながら、其要と爲る所は足にあり、此所に心着く者は其法を得ると知るべし、夫故それゆえ人の能不能を觀るには、手より足を心づけて視るべし、足協かなふ者は必ず勝身あり、一略一

一、勝は敵を打うつを勝ちと思はず、敵に打たれざるを勝と思ふべし、かくのごとく如い斯えならざれば得い勝えこと不い成え、

一、予曰、勝に不思議の勝あり、負に不思議の負なし、問、如何なれば不思議の勝ちと云ふ、曰、遵みちにしたがい道守じゆつをまもる術ときは其心必不い勇えと雖ども得い勝え、是心を顧るときは則不思議とす、故に云ふ、又問、如何なれば不思議の負なしと云ふ、曰、背みぢにそむ道違じゆつにたが術、然るときは其敗無い疑え、故に云爾、客乃伏す、

一、速きは靜なる中より出づるを善しとす、故に無體むたいにはやくせんと爲る者は、外見速しと雖ども内實は虚なり、能く此味を覺ゆべし、劔術者常々用心の處なり、

常靜子劔談 (武術叢書 国会図書館蔵) より